

曲直瀬道三の学友・西友鷗について

木下 勤

西友鷗については、『日本医学史』（富士川游著）および『近世漢方医学史』（矢数道明著）に「享禄元年（一五二八）、曲直瀬道三、二十二歳のとき遊学の志を立て、肥後の人西友鷗と共に東行して、下野の足利学校に入る」とあり、また『日本医譜』（宇津木益夫著）に略伝が出ているのみで、詳細は不明である。

演者はさきに『漢方の臨牀』三十周年記念第三十卷十二号に「西友鷗とその一門について（第一報）」と題して発表したが、今回これに、いささか考証を加え報告する。

友鷗は、西家の医祖である。西氏歴代のことには『小倉市誌』の西氏家系および家譜によると、父祖は代々、肥後八代郡山鹿の城主であった。その先は阿蘇氏である。中古の時、阿蘇氏より二家に分れて西氏、東氏と称した。のちにまた二家に分れて菊池氏、赤星氏となったが、その一族は

いまま阿蘇の神職を務めている。

西氏数世の孫を友鷗という。字は元閑、可竹軒と称し、のち蓬月斎を後陽成帝より賜わる（後述）。生年、没年は不詳であるが、肥後八代郡に生まれた。幼い頃から拔群の資質があり、初め左衛門督を称し、薩摩島津氏の将、三船宗連と戦い、敗れて豊後府内に走り、大友義鑑よしあきを頼り、豊後浦の浜に寓し、剃髪して友鷗と号した。次いで肥前平戸に赴き、ついに明国に渡り、居ること七年。福州遠台閣に就いて儒学を修め、雲林龔廷賢に就いて医学を学び、また靈符鎮宅の法を伝えられて帰国する。しばらくは大友氏に寄寓していたが、のち足利学校に赴き儒道を講ずとある。この時がおそらく前述の『日本医学史』および『近世漢方医学史』の中の曲直瀬道三略伝および年譜にある「享禄元年（一五二八）曲直瀬道三、肥後の人西友鷗と共に足利学校に入る」であろう。友鷗は、足利学校に逗留すること数年、のち下野古河に至りさらに医学を田代三喜に師事した。そして一溪道三は、友鷗より少わかし、故に之に兄事すとある。したがって、ここでも友鷗は道三と共に田代三喜に入門している。友鷗は明においてすでに、当時の名医龔廷賢につい

て学んでいて、しかも道三より年長でもあった関係で、先輩格として共に勉強したものとと思われる。

業を終えた友鷗は、織田信長に従って京へ入るとある。

信長がはじめて上洛したのは、永禄二年（一五五九）二月、道三が京都へ帰ったのは天文十四年（一五四五）であるので、友鷗は道三に遅れること一四年にして、京都へ入っている。京に在ること一年あまり、正親町天皇勅して、禁庭に友鷗をして論語、中庸を講ぜしめた。たまたま進講中に、中宮が急病にかかられた時、友鷗が引論診脈（糸脈）して薬を献上、奇効を奏して即治した。それが機縁となり、名声都下に聞えるようになったという。

永禄の御代は、天下争乱の時代で、王室は式微し、天皇は即位の礼を行うに当って、用度闕乏してほとんど大典もできない有様であった。これを憂えた友鷗は、織田信長、大友宗麟に説いて、その資金を献上させた。毛利元就も、これを聞いて金帛を献上した。これによって即位の儀整うて行われ、朝廷はこれを嘉賞し、官に任ぜんとしたが、固辞してただ別号を賜わることをお願いした。すなわち蓬月斎の号を賜わる。そして五位の上座で、とくに直衣白袴を着

ることを許された（直衣白袴は通常では無官の者には許されない服装）。老いてふたたび、肥後八代に帰り山中に住む。人みな神仙となして尊敬したという。

ちなみに、友鷗の子一鷗は、祥寿院を賜わり、法印、大藏卿、典薬頭に任ぜられている。また後裔は、世々豊前小倉藩の筆頭藩医として栄え、明治維新まで続いた名家である。

（福岡県京都郡）